

これら全ての昔話は王と王の妻が平和に（仲良く）暮らしていたという話です。この（この話の）王の家臣、大臣たちはクーデターを起こしました。そして王を追い出しました。王を追放したのです。そして彼らが国をのっとりしました。さて、王はどこに行ったらよいのかもわかりませんでした。彼が通りを歩いていると巨大なゴミ捨て場があり、王はそのゴミ捨て場に住むことにしました。服もなく、身につけているものだけでした。彼はそこに居座りそこに捨てられるものを拾って食べました。そしてそこで寝泊まりしました。ゴミを掘りヤシの実の殻をみつけると拾って置いておき、ゴミを捨てに来る人があるとヤシの実の殻に水をもらってそれを飲みました。私はいつもここにいる、ここにも行くところはないしすることもないといいました。彼はそこにいました。彼は毎日ゴミ捨て場のあちこちを掘っていました。その日、彼は大変大きい金の靴を見つけました。「ついにこの日がやってきた。」昔、このような木を彫った長い靴があって子どもたちが履いていました。上には金が塗られていました。現在は装飾品ですが昔はこのようなものを履いていました。この靴はとても大きくしかも全てが金でした。ダイヤモンドなど他のものでも装飾されていました。王はそれを見ると「なんと。これはたいそうな宝だ。このゴミ捨て場では泥棒に盗まれてしまう。彼はゴミの山から布切れを取るとその靴を包みました。ぐるぐると巻いて包んでしまいました。彼はそこで食べ物が手に入ればそれを食べ、布切れを拾ってはこれくらいの大荷物になるまで（靴を）包み続けました。金の光沢が見えないように布で包んだのです。そしてずっとその作業をし続けました。するとある日彼はもう一足を見つけました。あの靴のもう片方です。「ああ、これで2足になった。」彼はまた布切れを探し始め、もう一つ大きな荷物ができるまで包み続けました。「これらの大きな二つの荷物を見て人々は、私は何をしていると思うだろうか。」彼は二つを一緒にして布で二つとも包みました。それでもまだ彼はそこにいました。人々から分け与えられたものを手にしていました。ある人は彼のところを通った時にお金をくれたりし、食べ物を捨てる人もいました。ある日彼が海岸に行きました。海岸はゴミ捨て場から遠くはなかったのです。長い時がたち、髭は長く伸び、神も伸び、汚らしくなっていました。彼は海岸まで行きました。そして彼は大きな船が港に入り荷物を下ろしているのをみました。彼はそこへ行き聞きました。「船長はどの人ですか。」すると船長が現れました。「私が船長だが。」「どこの国から来たのですか。」「どこそこの国からだ。」彼は船長に言いました。「あなたの王に届けて欲しい荷物があるのだが。」船長は言いました。「わかった。持っていこう。」彼に返事はしたもののこの男が一体どこで荷物を得たのだらうと思っていました。しかし返事をしました。男は荷物を運んできて彼に渡しました。男はキャプテンに言いました。「神とペンをもらえらるだろうか。」彼は立派な文字で公式な手紙を書きました。「この荷物は私からあなたへの贈りものです、大事にしてくださいませように。敬具。」彼の名前は書きませんでした。最後にヤシの実の殻の王と書きました。ヤシの実の殻は知っていますよね。彼は自分のことをヤシの実の殻の王と呼んでいたのです、というのも彼はヤシの実の殻のところ（集めたところ）で料理をして食べていたので。「わかった。」その船長は荷物を受け取り王のところまで届けました。荷物を王に届けると彼は言いました。「手紙とこの荷物は海岸で出会った者から与えられました。あなたに届けるようにと荷物を託されました。」「なんでこんなに汚いのだ。汚れでいっぱい。汚い布切ればかりだ。」しかしその王は無視しませんでした。彼は人々に言いました。「おい、布をほどいてみよ。」布をぐるぐるとほどいてはまたほどき、そしてまたほどいていくと二つに分かれました。「なんと。ではお前はこちらをほどいて、お前はこっちを解ほどくのだ。」そして布をぐるぐるとほどいてはほどいていくと、ついに立派に装飾され編みこみ

のなされた金の靴が現われました。王は言いました。「このような宝物を送ってくれた人に私は一体何をあげたらよいのだ。船長よ、別の機会にまたその町に行って、この宝をくれた王にあったら私に言うように。」船長は「わかりました。」と言いました。船長は船の半分になるほど、男への荷物を積みました。たくさんのコンテナの中に国中の良品として知られるありとあらゆる財宝を積み込みました。そして男に手紙を渡すよう託しました。「この贈り物をくれた人にこれを届けてくれ。」到着すると船長は彼を探し、そして彼が同じところにいるのを見て彼を呼びました。「あなたの財宝が船の中にあります。私は王から手紙とともに託されました。」男は船長に言いました。「ありがとうございます。紙をください。あなたはここからどこへ行くのですか?」「どこそこの国です。」「紙をください。」彼は船長が向かう他の国の王へ手紙を書きました。「この贈り物はあなたに贈ります云々。」彼は同様に*ヤシの実の殻の王、とサインをしました。船長は荷物を届け王に言いました。「王様、私にこの荷物とこの手紙を託した人がいます。」王は荷物を降ろさせ大変な量の財宝を見ました。「なんと。こんな財宝を。この人に私は一体どんなお返しをしたらいいのだ。」そして王はどうにかしようと国中から良品を集め船の中に積みました。「彼に届けてくれ。」男のところに着くと彼は手紙を受け取り、また手紙を書き、それぞれの船長が最初に贈り物を託した王のところに届けるように指示しました。彼が段取りをしていたのです。彼は荷物を受け取るとあちらに送って、そして別のところにも送りました。彼には荷物を保管しておく場所がありませんでした。そしてどうすることもできませんでした。彼はあちらこちらへと荷物を送っていました。しばらくすると、王が言いました。「どうしたらいいのだ。何をお返しに送ったらいいのだ。毎度毎度彼は私に船の半分にもなるほどの贈り物を送ってくる。自分で会いに言ってみよう。すると別の王も言いました。「今度はその人がいるというその国へ行ってみたい。自分で行ってその人に会ってこよう。」船長のみがその人物を知っていました。誰もその男のことを知りませんでした。そこで王はその船長を連れて彼のところまで行きました。そこへ着くと船長は贈り物を届けに来た他の国の船が着いているのを見ました。そこで船長は別の船の船長に聞きました。「あなたは荷物を運んできたようだが、王に荷物を送っていた男からの荷物ですか。」彼は「はい。ここの(男性からの)ものです。ちょっと待ってください。彼を見つけてきますから。」と言いました。彼は海岸を歩いて回ると男を見つけました。長い髪、長い髭、汚れた服に汚い爪。「ええ、こんな人が。」王ともう一人の王は言いました。「この人が当本人なのか。」船長は言いました。「はい。」彼を見て彼らは手紙を開きこの人は別の人(誰か)に違いないと思いました。そして彼らが男を眺めている時、彼らは彼の指に王の象徴のような刻印が入った指輪がはめられているのを見ました。「いいや、この刻印が気になる。髪をきちんと切って、髭をそり、きれいにしてからここに(連れてくるのだ)。」ここに連れてくるのだ。私たちは彼と話をしたい。」そこで彼はことを済ませてやってきて王から質問されました。「どう思うか。」一人が言いました。「私はあなたがはめているこの指輪からあなたが王に違いないと思う。」「この国の王だったがクーデターを起こされ追放されたために外に逃げたのだ。そしてここに住むようになった。神は私にお恵みを下さって、最初に私があなたに送ったものだ、そしてあなたは私に贈り物をくれたがいったいどこに置けというんだ。置くところなんてない。だから他の人に送ったのだ。そして私は王だった時からあなたたちと友達で王国から少しずつ贈り物と手紙を送っていた。しかしあなたがたは私が問題を抱えたことを知らなかった。」彼は言いました。「いいえ。私たちは協力しあってあなたを国に戻します。あなたの領土をもう一度治めるようにさせます。あなたは私たちに好意で全ての贈り物を私たちに送ってくれました。自分でそれらを売ったら全く違う状況になっていただろうに、あなたはただ私たちを思っていてくれたのです。」彼らは友人に戻り、彼がもといたところに戻れるように助けてあげました。